

中国^{りょうねいしょう}遼寧省出身、時^{とき}光^{ひかる}です（本名）。

10年前、私費留学生として来日、大学卒業後、地域国際化協会にて3年間勤務、ボランティア日本語教室、外国人住民支援などの事業に携わり、はじめて外国人住民の現状を知ると同時に、地域のことに関心・意識をもちはじめました。現在JIAMで研修担当をしながら、多文化共生コーディネーターとして日々奮闘中です。

このコーナーでは、私の目を通して、「日本の地域社会、外国人住民の今」をご紹介します。皆様のまわりに多文化共生の現場があれば、ぜひ教えてもらい、いろいろ勉強させていただきたいと思います。日本全国、どこまでも飛んでいきます。

皆様からのご意見、ご感想、現場情報など楽しみにお待ちしております。

TEL : 077-578-5932 メール : h-toki@jiam.jp



国境を越えた人々、国境を越えたふるさと ～二つの故郷を思い、ふと「幸せ」について気づいたこと～

全国市町村国際文化研修所教務部
多文化共生コーディネーター 時光

◆二つの故郷をもつ在住外国人の気づき

2009年末現在、中国、韓国・朝鮮、ブラジル出身の方をはじめ、日本には約219万人の在住外国人が登録されている。2008年の金融危機によって一時的に減少したものの、派遣切りに遭った数多くの在住外国人は今、日本で再就職するために、日本語学習や再就職に必要な技術の習得に励んでいる。「雨降って地固まる」ということわざがあるように、これらの在住外国人にとって、今回の金融危機による失業等の様々な経験が、今、日本で暮らしている自分の立ち位置を再確認すると同時に、「自立」や「地域との関係づくり」の重要性に気づくなど、同じ地域に住む日本人との真の共生に向けて何が必要なのかを考える契機となったのではなかろうか。今後も日本で暮らし続けるであろう在住外国人のこの意識変化は、日本が彼らにとって、まさに出身国以外のもう一つの故郷になりつつあるのではないだろうか。

私自身も長年日本で暮らす在住外国人であり、日本と母国である中国との間に二つの故郷をもつ1人の在住中国人でもある。日本にお

ける外国人登録者数の第1位は中国人で、約68万人にも上る（日本に帰化した方、不法滞在者を除く）。ひと言で在住中国人とはいっても、その出身地、戸籍^(注)、学歴は様々であり、同じ在住中国人でありながら実に多様なバックグラウンドをもっている。来日目的は在留資格により多様であるが、日本に住む多くの中国人の本籍地は日本海に面した中国の東側に集中している傾向が見られる。この在住中国人は年々増加しており、多くの中国人はよりよい生活を夢見て、日本を目指すという事実があるように、近代的な国、日本は確かに中国の多くの地域と比べて物質的に豊かであることは否めない。しかし、私たち人間にとっての幸せは、果たして「物の豊かさ」で測ることができるだろうか、暮らしの「満足度」は果たして生活環境によって決まるものなのだろうか。今号では、素朴な中国内陸部と近代的な日本の生活を通して、日本に住む外国人や日本の地域に関する幸せの在り方について、二つの故郷をもつ在住中国人という視点から私の気づきをお伝えしたい。

国境を越えた人々、国境を越えたふるさと
～二つの故郷を思い、ふと「幸せ」について気づいたこと～

◆日本人上司とともに中国の実家へ

私の中国の故郷は、内陸部遼寧省撫順市撫順県章党郷驛馬村というところにあり、素朴な暮らしを送っている村人は、日の出とともに畑に出かけ、日の入りとともに炊煙が漂う家に帰る。その日常は、日本と比べものにならないほど不便だと思われるかもしれない。しかし、実に単純な村のスローライフはそれなりに楽しく、村人には一定の満足感が得られているのだ。



驛馬村の日常生活の一場面

正直なところ、日本に来たばかりの頃、私は日本人に自ら実家のことを話そうとしなかった。それは日本でも有数の都会、大阪でのシティライフを経験したためなのか、自分の村がどれだけ遅れており、話すのすら恥ずかしいと感じたからなのかもしれない。

しかし、日本で10年間生活し、日本社会の素晴らしい発展とは裏腹に、隣人が誰かすら知らない都会の希薄な人間関係、児童虐待の現実や子どもが実の親を殺害したりするような、あってはならない事件などの社会問題への理解が深まるにつれ、今まで見えなかった日本の新たな一面に気づいた。「人間にとって、本当の豊かさとは何か」、「それを測る基準は何だろうか」について考えさせられるとともに、日本の都市部と不便な中国内陸部の生活に対する見方がすっかり変わったのだ。つまり、お金や物に恵まれなくても楽しく生きていけるライフスタイルが驛馬村にあると私自身が気づくまで、日本に来てから10年間も年月がかかったのである。

そんな驛馬村をぜひ周りの日本人の方にも見ていただきたいと思い、元上司のS氏に声をかけてみた。すると「ぜひ連れて行ってほしい」とS氏は即答した。私は「本当に来るのか」とその返事を疑っていたが、2009年9月、広大な中国地図に載せてもらえないほど小さな驛馬村に彼はやってきたのだ。S氏に驛馬村滞在を経験していただき、それに日本人である「外の目」から見た驛馬村に対する印象を伺い、日本・中国の双方の観点から「幸せの在り方」という実に大切だが、ついつい見過ごしてしまいがちな興味深いテーマについて真剣に意見交換した。

◆中国人はなぜ笑ってられるか

今、まさに新たな町を創造していくといった大きな看板、テレビでよく流れてくるインドの市場のようなカラフルな傘の露店を車窓越しに見ながら、瀋陽空港から約1時間半、着いたところは、中国遼寧省撫順市撫順県章党郷驛馬村、私の実家だ。村は見渡す限り、風に揺れるトウモロコシ畑、そして甘い香りを匂わせてくれる葡萄園に囲まれ、レンガで作られている家の赤い屋根が姿を現す・・・S氏曰く、土ベッド用の煙突がある民家は日本のとは異なるが、屋外にある「ぼっこん」便所は、自分が小さい頃によく訪れた、京都市大原のしば漬農家を思い出させたという。「最初は無理だと思いますが、2、3日もすれば自然に慣れてきますよ」と私は照れながら村のことを紹介すると、「日本の田舎も20年ぐらい前までこんなものやった」と真剣に話すS氏のお話にとっても驚いた。

しかし、こんな驛馬村にも中国の急速な近代化の波は確実に押し寄せている。村からバスで40分もかからない撫順市北部にあるニュータウンの建設ラッシュは、まさしく「近未来の都市」以外のなにものでもない。さらに人々のファッション、「手机」いわゆる携帯電話、インターネットの普及による情報化の波はこの田舎にも確実に押し寄せている・・・。

私から見た日本の地域社会・外国人住民の今

その一方、未舗装の道に牛車が行き逢い、道端で人々が一日中のんびりと語り合う。この好対照というべき町の多層性、その層一つひとつの厚み、その層ごとで暮らしているたくさんの人々の姿は、私の実家だけでなく、まさしく5000年の歴史を誇る、人口13億を超える巨大国、中国の今の素顔そのものではなからうか。この多層性、つまり人々の年取、もっと具体的にいえば、都市戸籍、農村戸籍といったクラス、そういったクラスに応じた様々な暮らしができる社会があり、その社会層で暮らしていれば、それなりにその層の中で満足感が共有されている。



村の近くにそびえ立つニュータウン

一方、日本は、戦後、高度経済成長期を経て、「国土の均衡ある発展」という旗印の下、終身雇用、社会保障制度等の社会システムの整備等により、1980年代には「1億総中流時代」といった社会が定着しつつあったというS氏の話聞いた。

では、中国はというと、1949年に中華人民共和国誕生後、毛沢東という類まれなる強力なリーダーの下、社会主義の確立による国家の富強を国是とした。しかし、その後の歴史を見てみると、革命による社会主義の継続にこだわり、文化大革命という美名のもとに、政敵を粛清、「国家富強」の夢はかえって遠ざかってしまったと中国人である私ですら認めざるを得ない。事実、私の父親や近所のおじいさんたちは、「文化大革命の、あの10年がなければ・・・あの10年があったので・・・中国と日本との距離、いわゆる経済格差が一気に広がった」と遠くを眺めながら語ってくれた。

1980年代に入り、鄧小平による経済成長重視の改革開放路線への転換、社会主義体制での「貧富の格差」の正当化、大胆な開放政策による外資の導入などにより、「国富」の復興が実現された中国は著しく成長し、今では、中国の国内総生産が今年日本を追い抜き、ついに世界第2位になるという見方もあるほどだ。ただ、あくまで中国共産党の一党独裁、私有財産の制限のもとではあるが、いろいろな層が暮らしていける、暮らしていかざるを得ない社会が築かれてきているような気がした。この様々な層が日本社会のようにすべてボトムアップしていくのか、それとも各層の貧富の差が今以上に広がっていくのか、どちらかといえば後者の方に近づいているのではなからうか。

そういう社会、つまり「都市戸籍」、「農村戸籍」、さらには日本と比べものにならないほどの学歴競争社会の中での明確な勝者、敗者のクラス分け、IT化の推進による情報過多の社会の中で、より所得の高い層へと自分をおことうと懸命に努力する人々がそこにいる……。今後の所得分配論や家族に対する見方、考え方の変化、一人っ子政策による歪な人口ピラミッドを俯瞰し、13億以上の人口を抱える中国が、今後どのような舵取りをしていくのか、非常に興味深く、近隣の日本だけでなく、全世界から注目されているだろう。



中国の庶民層における楽しいひととき

中国には様々な社会層があり、決して裕福とは言えない、日々生計に追われる人々が満足げに、時には晴れやかな笑顔でいられるのは、

国境を越えた人々、国境を越えたふるさと
「1億総中流時代」の故郷を思い、心「幸せ」を感じた瞬間

多くの日本人にとっては理解しがたいかもしれない。一方、日本社会は、労働者派遣法改正による、終身雇用体制の事実上の崩壊、派遣労働者の増大、さらに2008年の金融危機により、多くの地域で、在住外国人だけではなく、日本人も含め、派遣労働者が悲鳴をあげ、厳しい生活に直面している。しかし、私から言わせれば、仕事を失った立場ではあるが、それでも中国の多くの地域と比べれば再就職できるチャンスがあり、物質的にもまだ恵まれているのではないか。中国と日本、二つの故郷の暮らしを知っている私から見れば、目の前にあるこの日本と中国の現実、そして人々の「満足度のギャップ」は「本当の豊かさとは何か」を考えるにあたって、非常に興味深いものを感じている。

◆もう一つの故郷、日本は幸せになれるか

私が生まれ育った驛馬村の人々の日常生活、家族のあり方、一族みんなで助け合いながら共に生活をし、身の回りにいる人への気遣いを忘れない「こころ」こそが、何ものにも代え難い、大切なものではないだろうか。そのころがあるからこそ、モノに恵まれなくても、お年寄りが健康であること、娘が進学校に受かったこと、父親が息子と一緒に畑に出かけること・・・当たり前の日常に対して素直に喜びを感じ、どんな環境におかれていても日々笑顔で、「本当の豊かさ、幸せ」を実感できるのではないだろうか。

S氏の話によると、驛馬村の風景は、自分の小学生時代の日本の日常に非常に近いものがあり、その頃の日本も町内の人々が互いに声をかけ合い、人々の間に温かいものがあつたという。光通信やブロードバンド等、日本のどこにいても情報に接することが可能な、ある意味情報過多の社会の中であるからこそ、「顔の見える関係」がより一層重要になるのではないかとS氏の所感に私も同感であった。

現代社会の中で、必要な情報は何か、その

情報に対して無関心ということではなく、共有化する必要がある。「人々が一定の満足感を得る中で生きていき、その生きがいをサポートできる」多様な価値観を寛容できる社会を構築することこそ、21世紀における日本に今一番必要なことではないだろうか。画一的な価値観を国→県→市と画一的に推進することで、国土の均衡な発展を果たしてきた自治体運営から、水平方向、更には多層性のある地域経営を目指し、その担い手をつなぐコネクタに、市町村の職員の皆さんがなってくれば、在住外国人も含め、地域に暮らす多様な住民が幸せな日常をより実感できるのではないかと、驛馬村に光る満天の星を眺めながらふと思った、久々の里帰りの旅だった。

(注) 中国では、戸籍制度があり、全ての人民は機関、団体、学校、企業などの組織のいずれかに所属するようになっている。所属組織の所在地により、「農業戸籍」、「非農業戸籍」（俗称「農村戸籍」、「都市戸籍」）に明確に区別され、就職や移住地の選択といったことは戸籍によって影響される。